



Data

監督・脚本：キム・ヨンフン
 原作：曾根圭介『藁にもすがる獣たち』（講談社文庫刊）
 出演：チョン・ウソン/チョン・ドヨン/ベ・ソンウ/チョン・マンシク/チン・ギョン/シン・ヒョンビン/チョン・ガラム/ユン・ヨジョン/

👁️👁️ みどころ

最近の邦画はピュアな「純愛モノ」や、弱者への「寄り添いモノ」が多いが、韓国映画はアクの強い作品、キャラの強い作品が多い。すると、曾根圭介の、アクの強い原作『藁にもすがる獣たち』は、韓国の映画がベストマッチ！

それがピタリの中だったし、美人女優、チョン・ドヨンの悪女キャラは原作以上の出来。そして、10億ウォンは約9500万円だから、これぐらいが“藁にもすがる獣たち”の人生を動かすきっかけになる金額！？『ワイルド・シングス』（98年）と同じように、二転三転、そして四転五転していく物語はめちゃ面白い！

もっとも、日本人の個人金融資産1900兆円を考えても、大金は使ってこそその価値！？それを痛感！本作の結末を見ると、続編の誕生も！？

—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————

■□■曾根圭介の原作はキャラの濃い韓国映画とベストマッチ■□■

近時の邦画は『花束のような恋をした』（21年）のようなピュアな“恋愛モノ”、『心の傷を癒すということ』（20年）のような“寄り添いモノ”が花盛り。これは、「すべての人にやさしく平等に」が潮流になってしまった昨今の日本社会のせいだ。『すばらしき世界』（20年）と『ヤクザと家族 The Family』（21年）という、直近で公開された2本のヤクザ映画も、かつての『昭和残侠伝』シリーズ（65～72年）や『網走番外地』シリーズ（65～72年）等のめちゃカッコいい(?) ヤクザ映画（任侠映画）とは大違いの、みじめな(?) ヤクザ映画だった。しかし、1967年に静岡県で生まれ、早稲田大学商学部を中退、サウナ従業員、漫画喫茶店長、無職時代を経てミステリー作家になった曾根圭介の小説は、そんな近時の潮流とは正反対。彼の小説『藁にもすがる獣たち』（13年）は、カネに取りつかれ、欲望をむき出しにした人々が激しくぶつかり合うサマを描いた犯

罪小説だ。

他方、『パラサイト 半地下の家族』（19年）（『シネマ46』14頁）はもとより、近時の『犯罪都市』（17年）（『シネマ42』268頁）、『エクストリーム・ジョブ』（19年）（『シネマ46』239頁）、『悪人伝』（19年）（『シネマ47』229頁）等の韓国映画の“刑事モノ”、“犯罪モノ”の登場人物たちのキャラの濃さを見れば、曾根圭介の小説は邦画よりも韓国映画とベストマッチ！私のみならず、誰もがそう思うはずだ。

人間の本性を巡っては、相対立する「性善説」と「性悪説」がある。したがって、どんなストーリーのどんな局面において、そのどちらが正しいかを探っていく映画も面白いが、どんな人間もその両者を備えていることを前提として、どんな局面になれば、そのどちらが出現するかを探っていく映画も面白い。本作はまさにその後者だから、“藁にもすがる獣”状態になった人間たちは、突然10億ウォンの大金を目の前にした場合、「性善説」に従って行動するの？それとも「性悪説」に従って行動するの？それをじっくり観察したい。

■□■本作の主役3人は？原作小説の主役3人との対比は？■□■

本作に登場する“藁にもすがる獣たち”の“主役”は、①暗い過去を清算して新たな人生を歩もうとする女・ヨンヒ（チョン・ドヨン）、②失踪した恋人が残した借金を抱える男・テヨン（チョン・ウソン）、③事業に失敗し、今は地元のサウナのアルバイトで妻と認知症の母親を何とか養っている男・ジュンマン（ペ・ソンウ）、の3人。なお、見方によっては、④株式投資の失敗により、家庭が崩壊して不幸の沼に嵌ってしまった主婦・ミラン（シン・ヒョンビン）も4人目の主役と考えられる。また、その他の面々も同じような“曲者”ぞろい。本作ではまず、そんな“藁にもすがる獣たち”の、韓国特有（？）の“濃いキャラ”に注目！

それに対して、曾根圭介の原作小説に登場する3人の主役は、(a) 父親から受け継いだ理髪店を潰してしまい、サウナでアルバイトをする初老の男、(b) 夫のDVに耐えながらデリヘルで働く主婦、(c) 元恋人に多額の借金を背負わされ、ヤクザの取立てにあえぐ悪徳刑事の3人だ。この両者を対比すると、本作の③ジュンマンがほぼ原作の(a)に相当し、本作の④ミランが、ほぼ原作の(b)に相当する。しかし、本作でチョン・ウソン演ずるハンサム男・②テヨンは、出入国審査官の“お役人様”だから、原作の(c)悪徳刑事とは大違いだ。さらに、『シークレット・サンシャイン』（07年）（『シネマ19』66頁）、『ハウスメイド』（10年）（『シネマ27』67頁）等で名演技を見せた韓国を代表する女優、チョン・ドヨン演じる①ヨンヒは、原作者の曾根圭介ですら思いつかないほど、とてつもなくえげつない、韓国特有の、血も涙もない女傑（？）だから、本作では、とりわけこの①ヨンヒのキャラに注目！

本作の冒頭は、右手に持たれたボストンバッグがサウナのコインロッカーに収納される姿をクローズアップで捉えるシークエンスから始まる。そのストーリーは原作と同じだが、

この撮影はさすが韓国映画！と思わせる美しさと迫力がある。その中に入っている金額は10億ウォン。そう聞いても日本人にはピンとこないし、原作でも本作でもそれが使われるシーンが全く登場しないから、その価値はわからないが、10億ウォンは約9500万円だ。ちなみに、多分日本でも韓国でも、これくらいが“藁にもすがる獣たち”の人生を動かすきっかけになる金額なのだろう。

■□■最初にボストンバッグに手を付けるのは誰？■□■

私が映画評論を書き始めるきっかけになった面白い映画が『ワイルド・シングス』（98年）。同作は、まさに「ワクワク・ドキドキ・ラブラブ、これが映画の醍醐味です。」と書いた見出しに値する名作（快作）だった『シネマ1』3頁）。その評論で、私は「これは、もう絶対おすす。5転・6転のストーリーが読めれば天才。」と書いたが、それは本作も同じだ。

もっとも、本作冒頭のボストンバッグがサウナのコインロッカーに収納されるシーケンスを観た後の焦点は、誰がそれを取り出すのか、になる。そのロッカーのキーを持っているのは当然そこにバッグを入れた本人だが、それはもちろんストーリーでは隠されている。その結果、最初にロッカーを開けてバッグを発見し、更にその中に大量の現金が入っているのを見つけるのはジュンマンだが、私にはその後のジュンマンの行動はメチャ意外。なぜなら、ジュンマンはそのままそのバッグを持っていくことができたにもかかわらず、良心的に(?)それを忘れ物の保管室にしまい込んだからだ。もっとも、それが本当に良心的な行動か否かは、彼がそのことをサウナの支配人・サンドン（ホ・ドンウォン）に教えていないことや、わざわざそのバッグを他の荷物の後ろに隠していたことから明らかだが、さて彼はこの時点でこのバッグ（＝現金）をどうしようと考えたの？

こんな良心的な(?)行動を見ていると、この時点で彼はきっと、まだ“藁にもすがる獣”になり切れていなかったのだろう。しかし、認知症の母親・スンジャ（ユン・ヨジョン）が、妻のヨンソン（チン・ギョン）につらく当たったり、そのとぼっちりで妻が骨折して入院、更にそんなゴタゴタによる数回の遅刻を咎められ、サンドンから“クビ宣告”をされてしまうと、ジュンマンは“藁にもすがる獣”状態に。その挙句、彼は遂に保管室に置いた現金入りのバッグを持ち出そうとしたが、そこでサンドンとの間に思わぬハプニングが発生！こりゃ絶体絶命、と思われたが、そこで見せる、さすが“藁にもすがる男”・ジュンマンの爆発力と瞬発力に注目！

■□■第1の殺人は誰か誰を？ところが、アレし・・・■□■

私は園子温監督が大好き。とりわけ、「パンチラ」をテーマにしなが（?）、さまざまな人間の本性を描いた『愛のむきだし』（08年）（『シネマ22』276頁）や、『冷たい熱帯魚』（10年）（『シネマ26』172頁）、『恋の罪』（11年）（『シネマ28』180頁）等の人間の性と業（サガ）をトコトン掘り下げて生々しく描いた初期の作品が大好きだ。『冷たい熱帯魚』では、石井隆監督の『ヌードの夜／愛は惜しみなく奪う』（10年）（『シ

ネマ25』183頁)の冒頭シーンを上回るほど残忍な、風呂場で死体を切り刻むシークエンスまで登場していたが、昨今の“お上品さ”が売りになってしまった邦画では、もはやそんなシーンは到底ムリ。しかし、えぐいシーンに抵抗感のない(?)韓国映画なら、それもOK!?

そうかどうかは知らないが、本作ではどこかユーモアのある“ボストンバッグの移動物語”とは異質の、ドロドロした人間ドラマでは、最初の殺しの物語として、ミランと、中国の桓仁からやってきた不法滞在者のジンテ(チョン・ガラム)との共謀による、ミランの夫・ジェフン(キム・ジュンハン)殺しが登場する。その計画は、夜中に飲み屋から千鳥足で出てくるジェフンを、ジンテが車で跳ね飛ばすだけの単純なものだから、首尾は上々!自宅でジンテからの報告を聞いたミランがそう考え、それに続く保険金請求の段取りを考えていると、玄関のドアがノックされ、当の本人が戻ってきたから、アレレ!ジンテは間違いなく死体を山の中に埋めたと言っていたのに、何とそれは別の男の死体!?

■□■この美女によるあの美女殺しの凄惨さは園子温以上!■□■

本作第1の殺人事件は、深刻な状況下にもかかわらずどこかユーモラスなところがあった・・・?しかし、風俗店で働いている美女・ミランに同情したかのように近づいてきた、ベンツに乗った美人女社長・ヨンヒが、ミランに第2の保険金殺人計画を持ち掛けるストーリーを観ていると、この女社長の悪女ぶりが際立っている。毒を食らわば皿まで。それは古今東西を問わない鉄則だが、夫殺しによる保険金詐取に失敗したミランにとって、「幽霊が出てくるから警察に自首する」と喚くばかりの、だらしない男・ジンテを見切り、これを殺害の上、土の中に埋めてしまったのは仕方ない。

しかし、その上を行くのがヨンヒで、ヨンヒはまだ生きているミランのDV亭主・ジェフンを、今度こそ保険会社に怪しまれずに殺害し、保険金を受け取る方法をミランに伝授したから親切なものだ。そんなアドバイスもあって、ミランの2度目の保険金目当ての亭主殺しはまんまと大成功。しかし、それによってミランに大金が入ってくると、ヨンヒは一方ではミランに“高飛び”を指示し、他方では、園子温監督の『冷たい熱帯魚』を上回る凄惨な手法でミランを切り刻み、バラバラ死体にして本作の舞台になっている港町の海の中に投げ捨ててしまったから、アレレ・・・。ちなみに、そこでの名セリフが「金が欲しければ誰も信じるな」だから、これは本作の面白さと共にしっかり記憶しておきたい。

■□■物語は二転三転!そして四転五転!こりゃ面白い!■□■

本作は韓国の名優たちが多数出演し、それぞれの個性的な演技を競っているが、本作中盤には韓国男優 NO.1 のチョン・ウソン演じるテヨンと、韓国女優 NO.1 のチョン・ドヨン演じるヨンヒが元恋人同士として、テヨンの部屋の中で再会するので、それに注目!

本作導入部では、出入国審査官というお堅いお役人(であるはず)のテヨンは、金融業者のドゥマン(チョン・マンシク)から借金の返済を迫られ困惑する姿が描かれる。しかし、その借金は自分のものではなく、跡形もなく失踪してしまった恋人・ヨンヒが残した

もの。そんな金で購入したベンツに乗ったヨンヒは「女社長」と呼ばれ新しい人生を歩んでいたが、ミランを殺して金を奪い、その死体を切り刻んで海の中に捨ててしまったにもかかわらず、今またテヨンのアパートに戻ってきたから、アレレ……。その事情にアレコレあるのは当然だし、厚かましくも再度テヨンの前に姿を見せたヨンヒが、何らかの次の策略を練っていたのも当然だ。しかし、それは一体ナニ？また、目の当たりにヨンヒの姿を見て、当初は怒り狂っていたテヨンも、その後冷静にアレコレの計算をし始めたのは当たり前。その結果、美男美女ながら“藁にもすがる獣” 男性 NO.1 と、“藁にもすがる獣” 女性 NO.1 の2人が目指した次の行動とは？

ヨンヒは莫大な自分の借金をテヨンに押し付けたまま失踪したのだから、二度とテヨンの前に登場できないのが常識だが、並外れた厚かましさを持ったヨンヒにはそんな常識は通用しないらしい。しかし、ヨンヒが再びテヨンの前に登場したのはなぜ？それはテヨンでなければできない“ある仕事”をやってもらうためだが、その“ある仕事”とは一体ナニ？そこで効いてくるのが、原作では「悪徳刑事」としている“藁にもすがる獣”(c)の職業を、本作のテヨンについては「出入国審査官」としたことだ。

『ワイルド・シングス』のストーリーも二転三転 から四転五転して面白かったが、第1の殺人、第2の殺人を経た本作中盤では、男女の主演2人が再び意気投合(?)するところから、また四転五転していくことに。こりゃ面白い！

■□貯めるだけで価値！いや大金は使ってこそ！ところが？■□

2021年2月15日、日本の日経平均株価は遂に3万円を超えた。バブル絶頂期だった1989年12月29日の最高値が3万8957円44銭だったから、“失われた10年”、“失われた20年”を含む平成の30年間を終え、令和の時代に入った日本は、再びバブルに突入？

他方、トランプ大統領の4年間、上昇に上昇を続けたアメリカの株価は、バイデン政権に移ってもなお“史上最高値”を更新し続けている。それに比べると、「日本の株価は更なる上昇の余地がある」という見解にも一理あるが、私にはそう思えない。国債発行額の増大、過度の金融政策への依存はもとより、コロナ禍での日本の実体経済の悪化に次ぐ悪化は深刻で、株価上昇に浮かれる状況ではないはずだ。ところが、興味深いのは、一方では国債発行額、つまり政府の借金が増え続ける中、他方では①国民1人1人の個人金融資産と②民間の非金融法人企業の金融資産も増え続けていることだ。

2021年2月24日付日本経済新聞、松林洋一(神戸大学教授)の「個人金融資産1900兆円の行方 上」によれば、2020年9月末時点の上記①は1901兆円、上記②は1215兆円に上っているらしい。なるほど、なるほど……。しかし、私はなぜここにそんな論文のことを書いているの？

本作は10億ウォンの現金が入ったボストンバッグを巡る、“藁にもすがる獣たち”の、殺人事件を含むどぎつい人間模様を描いた映画。ところが、それにもかかわらず、誰も1

0億ウォンもの現金（金融資産）にほとんど手を付けず、サウナのロッカー室や忘れ物の保管室、あるいは“藁にもすがる獣”のタンスの中に貯蓄され続けている。それって、一体なぜ？大金は使ってこそ価値があるのでは？貯金しているだけでは何の価値もないのでは？そう考えると、本作の鑑賞には前記論文が大きく“運動している”からだ。ミランを殺して大金をせしめたヨンヒは、出入国審査官のテヨンの協力を得て、カルロス・ゴーン元「ルノー・日産・三菱アライアンス」社長兼最高経営責任者のように、「華麗なる国外脱出」を目指したが、韓国の港町を舞台にした本作ラストでは、まずヨンヒがあえなくドゥマンの「御用！」とされたうえ、ドゥマンからの再三の催促にも関わらず、デメキン（パク・ジファン）と共に逃げ回っていたテヨンもとうとう追いつめられることになる。

本作は“藁にもすがる獣たち”の殺し合いを含むそんな人間模様（人間ドラマ）がメチャ面白いからそれに注目だが、それと同時に10億ウォンの入ったボストンバッグは最後にどこへ行くの？その事にもしっかり注目したい。本作ラストの何とも意外な結末を観ていると、曾根圭介の原作には続編がないが、映画ではひょっとして続編が誕生するかも・・・？そんな期待も膨らんでいくことに・・・。

2021（令和3）年3月1記